特1
3384

国立国会図書館　タイトル『湖魚考 2巻』 請求記号 特1-3384

ガラス使用

特1-3384

湖魚考序

国立国会図書館　タイトル『湖魚考 2巻』 請求記号 特1-3384

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『湖魚考 2巻』 請求記号 特1-3384
ガラス使用

文化の三丙寅年の春月比より
小林の義兄しる

附て又

其考と文字此ての論ひなきて考
ましてもしや板ひの事と魚
雑てとも此考と競て面しく雑魚
うとも雑いとひとも面しく
とつるれとも若く望ひ
ひあとをおつて書
めり

又雲よ此ふ小魚
を名とて又雲此書と面
ふとも

今此信ひつるれ
ふ

是は文字にいまて
第用切紙のとき本草の新異説書に
小魚と論して此ふといつれとんとこと
そいとて
奥此めとの字なとふとの雌雄此事とんやの
らむとあて書り
本草綱目とも又圖説の注と
つくとふとふ
文雲此事と自人のつくとゆるを
指文のめく面字又事例をまし

こひ　鯉魚　はるこひ　こごひ　えごひ

頸かうもちいさく口揩ふかく眼うへに黄色ありて瞳黒く腹ふとく両方へ張きひげをもつ大なる人のごとく勿ふかなれども水をふくむ事甚だ多し鱗の数亦多尾鬐すこやかにして三十六ありて甚堅けり脊黒く腹白くあるものは性よく水に近き入江などにすみ色黄ばみうすくろしこれは久しく清水にすみて性急なる故なり川の淵ふかく久しくすめるものは脊ふとし色ちかくして性急なる故なり

大小ともに二尺余 鰊をはらわたといっしょに塩漬けにしたもの即ち腐魚 くさりの小を拉七 乳酸という毒物ができて酸っぱくなる 土用芳味甚よろし 秋になって味おいしく美味 冬に陽気のために氷を生じて沖より流れ来る川水 鰊となんら変わらない 蔭の苗前の苗 水の温度 大魚雄魚の形 雌魚 ちいさしまうや 腐った雌魚 こころも雄魚ふうに沖 二ヶ月経ってもまだ 大きく形も 信をとり 密なるべし 腐魚風味 人を思わんと 入江 田小なるところ 暗きしけ魚 味よろし 琴沖 小網 和泉 奥の上品味の最上 小網のこと 入江川 大網 大魚 二尺 小を拉七 乳酸 土用芳味甚よろし 秋 陽気 氷 生じ 沖より流れ来る川水 鰊

国立国会図書館　タイトル『湖魚考 2巻』 請求記号 特1-3384　　ガラス使用

諸説

鯉　和名鈔曰七巻食経云鯉魚上音里和名古比　野王按銘

胡卧反 說文曰鰥 胡瓦反上声之重 爾雅云鱯 度音 皆鯉類也
本草綱目云鯉為魚品上而陰類故有六六陰數而其脉一
道從頭至尾無大小皆三十六鱗每鱗有小黑點鱗有十
字文理故名鯉雖困死不反白
弘景曰鯉為諸魚長形既可愛又能神變乃至飛越江胡
所以仙人琴高乘之也山上水中有此不可食
崔豹云亢仆人呼赤鯉為玄駒白鯉為黄驥黄鯉為黄騅
三才圖會云鯉不相食故其種易蕃 陶朱公畜魚計
每歲雌雄二十四頭生子七万枚此験也
五雜俎云俗言鯉能化龍此不必然其性通靈能飛江湖
如龍門之水險急千仞魚無能越者独鯉能登之故

有成龍之説耳
字彙云黒鯉白鱓蓋老則鱗色稍黒也乃老鯉平仌鯉
自頸至尾岐長一尺計者二年鯉如三年者尺一二寸如四年
者尺三四寸経五年者尺五六寸以上不謂年数稱六須波
七須波八須波其八須波有二尺一二寸每一年長也近三尺者
希愚三尺餘者呼曰尺之鯉有化龍之勢
又云鯉良以切音李有神能飛魚之貴者 本畧 有赤白黄
三種故爾雅釈名以鯉冠篇 神農書曰鯉最為魚之
主庚閏詩煉形去人俗飄忽乘雲遊磐魁扶桑隠忽
見東岳魚或云鯉有六六陰之數是諸家之説以龍有
九九重陽之數對之興言竟至于登禹門化為龍是

国立国会図書館　タイトル『湖魚考 2巻』　請求記号 特1-3384
ガラス使用

陰極陽復理之當然也

ふか　翡奥　まぶる　はちやう　へら

にころ　ちやうこ　りうぐ　るまぶね

ひるら　るみぐら　つふる　よごふか

形大海ゝ翡の如く平たくありて清き赤翡の雄ける物を
腹大きく肥えり也雌奥に形ちも雄奥に似ちいさく雄奥大きく淡赤
色多く腹の下へ入江又は池などにありて魚を捕食し清水に久しくいけ置
ても死するごとくに弱ふしておろくるまをおしみ又食ふ也

くに速吹しく行く沖宮純ゝ海鄙奥と書くたゞ洲
を略ふしく呂波の翡奥也

赤翡　又うるるるる赤翡ゝ雄奥大きく赤色多く
す二尺ばかりありといゝ柿之雌
の如き赤色ゝ腹の下赤黄色ゝ
まて淡色ゝ赤黄色ゝ
ばかりゝ
雄長　赤翡の雄うるるまるるちいさ
く身長く味よろしけ雄翡の
をいくゝ鮨乃至揚をのべくゝ

ころ まるく丸きを逆大サ四五寸より五月中旬より沖の汀ふち

似五色 志賀こゐおし形共逆ひらを舒角りこうを望ること大サまるこおし小さ

けり鯰なく商中まふくめりしく修る魚を大サ七八寸を

渡人これを癩病魚之ごとくに称する にこの雄魚之雌魚

ろ胸いとまゐる

もうぞ 又ひほこうを沙ゐ〜共黄赤

ひ沖より洗まふくよる大サ三寸より大きし味中ふや

なまる 学術のる角りこる時の名之五六月ふり

ひるこ 志賀小沙ゐ鯰細くこちいさし大サ尺ふ寸より

尺六七寸の色いと柿之ふく八六七寸は逆入海まるて

沖まこまる之味まろし本草雑物とふ哈といへるもこれ

ひるこをとらびこと姓別をふ

こよくつるも

和漢雑 雌雄ありるこふしみのりをとなりくを

志賀の秋こるを紅葉賀という雌共秋の名なるくし

大サまふるのこし八月の比より沖より群遊こふ

事もを大細こを夜こ鯰逆来く血をりこるめく鯰り

国立国会図書館　タイトル『湖魚考 2巻』 請求記号 特1-3384
ガラス使用

鰉　和名鈔曰本草云鰉魚〔上音卽〕一名鮆魚〔上音附和名布奈〕
四声字苑云鰉鰣績〔三字並干亦反今按通用也〕
本草綱目曰鮆似小鯉而色黒而體促吐大而脊隆其旅行
則吹沫如星而相附故曰鰣喜偎泥不食雑物故能補胃
冬月肉厚子多其味最美
同附録　鱘魚説曰一種鱘魚与鰣頗同而味不同功亦不
及云鱘是獦化鱘是稜米所化故腹尚有米色寛大者
是鰣狹小者鱘也　時珍曰呉氏言鰣背獦稜化
成者殊為謬説惟鼈鼠化鱘鱘化鼈鼠錨績霏雪
録中掌昏之時珍掌見之此亦生々化々之理鰣鱘多子

不尽然爾下畧

本草心讀云鯽頭春月腦中有蟲此魚原田稷米化生故
肚尚有米色

字彙曰鮒防父切音附小魚也今之鯽陸佃云此魚旅行
吹沫如星以相即謂之鯽以相附謂之鮒

膳夫録曰膾莫先于鯽魚膾魚之第一也

鱒　あめ　川まて

まるで光ることあめのごとくいわ魚のごとくにて
ふるさと一つにあらず諸こと鱒こと
後の方ふしを白きもの鮎のごとし脊と腹の中程黒し

く両面に智を好り又脊の上に黒斑の円堆斑と
赤くして遠好り但雄の方遠大きく雌よりこまろし
つと雄の方きらしく雌のごとやせ
背細くやつるみて腹そし大方大海なきみの魚のみ
し大きこと五六なるもまれに大かつ二尺を越
と十月の末より雪を冒て交あるくひともでんて
ふる之を大ふたるものと
なるて生長せ此を登と云此腹にるふしを初氷
きものうを此を最此方面好氷魚ともふ
を須ふるにより名を此るものと

八月上旬ヨリ下旬ニ至テ雄魚ハ肉鮮ヨカラス
シテ味モ亦ツマラヌモノデアル九月末ツヽキ
ハ少シヨクナルガ此時期ハ雌魚ノ最モ味ノ
モ肥ヘテ美味ナル時デアル雌魚ハ此ノ時
ヨリ鱗ヲ剥ヒデモ白クナリ又ハ赤クナリ
イヽヤウニ成ルガ雄魚ハ此ノ時ニ至テモ
ソレ程ニ美味ニナラヌ十月ニ入ルト雄魚
ヨリ次第ニ雌魚ハ味ヲ減ジ十一月ニ入ル
ト二ツ連リヲ以テ此魚ニ取テハ大敵ノ
来ルノデアルソレハ鯔ト鮭トデアル

十月ニナルトカラシキヤウニアル此ノ頃
ヨリ沖ノ方ヘ下ルヤウニナルソレカラ
ソロ〳〵雑魚ヲ追テ来ルノデアル
ナルヘクハ十月ノ末十一月ノ初メ
テ捕ヘルヤウニシタイモノデアル大方沖ヘ
下ル頃ハ雌魚ノ腹ノ大キイ時デアル
時ヲ定メ人ヲ頼ンデ網ヲ引テモラフ
モノデアルカラ遠ウテハ出ラレヌ
美味ヲ一度ニ失フテ又ヤ玉ノ如ク
細ヒヤヽ川ニ下ル頃ニ二三度上ノ網ヲ
引テ奥山氏谷川ヨリ湖ノ奥ヨリ肥大ヨリテ新ク

腊名无月まで行色多くいう

諸説

鱒 鰍 赤腹魚 鱒 又腹赤奥
和名鈔 七条食経云 鱒 遠稽反音撰 一名赤奥 和名戸須
今案作鱒
奥名苅云 一名鰍 晴似鱒而赤目者也
鮭 鱒 草魚 水鮭 江鮭 鱒
和名鈔云 雨雅注云 鮭 胡本反上声之重字 似鱒者也
亦作鱒 和名阿米
今案本文未詳
揚氏漢語抄曰 水鮭一云江鮭 和名波良可 音宣今案所出
同曰 鱒奥 赤色立成云 鮭魚 本朝式用腹赤二字
今案本文未詳
食之媿逸

景行天皇之時従肥後国宇土郡長濱貢之
聖武天皇之時自太宰府貢之毎正月元日有腹赤魚熟之云
今筑州千歳川辺奥多也
本草綱目曰 鱒似鱒而小鱗亦細於鱒赤脉貫瞳身円
長者責質赤章好食螺蜂善干遁綱性独行尊而必
者故字従尊従必
同曰 鮭生江湖中似鱒大其形長身円肉厚而鬆状類青
奥有青鮭白鮭二色其性舒緩故曰鮭俗名草魚其
食草也
大和本草云 鱣魚 アメノウホトト訓 本草綱目鱘魚ノ附録ニ入

国立国会図書館　タイトル『湖魚考 2巻』　請求記号 特1-3384
ガラス使用

セタリ鱖ノ類也ト云リサケニ似テ味ヨシ琵琶湖ニ多シ鮮ヲアメウヲト訓ス未是ニコヒナリトス

みごひ　鱖　小ト真似鯉ニ似テ

形鯉ノ如ク鯉よりいやしく鱗こまかく数多し肉ふくらかにして小骨を味も又鯉よりおとれり腸ふくらかにてよし大サ二尺余に至るもまれなり

春末より冲よりきたる汁ニ入らと一梅ぼし鮓にしてよし雄雌ハ雌美ニして雄ハ大さし小なるとまれなり三四月ころ多也未詳

和名鈔云　鱖　文字集略云　鱖　音厥魚似鱖字彙云　鱖似鱖二説大異也　漢語抄云美　鯉属也

三才図會云按俗称美鯉者似鯉而身狭長於鯉鱗細於鯉肉有細利味亦芳湖中多有之　元鯉与鱖之差如新与陳長

鯎　ろさう　黄顙魚

小とせんし　又ころない　ころすも

かんさう　是ハ苗ノ一寸四五分ほどを

状そとをひくみたんめくりて身うすく広し頭ちいさく眼大さし背刃ニ尖くそりて腹ふくらかにして肉とろし味中不四月比冲より

国立国会図書館　タイトル『湖魚考 2巻』 請求記号 特1-3384
ガラス使用

汁ま[illegible]合又[illegible]鮒[illegible]仕五月末六月
[illegible]雌雄[illegible]雄おし四月の[illegible]
水田又[illegible]稲の苗をくらふ[illegible]草矣[illegible]五月末[illegible]
腸ありてまるし[illegible]腸ありけく味よし[illegible]
程なく[illegible]大きなるもの尺余[illegible]
と大海の鰊魚[illegible]この[illegible]
いづれも[illegible]
くらふ[illegible]
[illegible]月の[illegible]
小細ふくすくひ[illegible]腸多く味[illegible]

うま鮒[illegible]同別種形鮒[illegible]
奥原氏曰本草綱目曰黄鰁魚生江湖中小魚也状似白魚而頭尾不
昂扁身細鱗白色洞不踰寸長不近尺可作鮓煎炙
甚美亦魚腸腹多脂漁人煉取黄油然燈甚鯉也
或曰黄鰁魚状似小鮒而鱗白光色大五七寸許其腸極苦
脂多故俗呼曰腸子所々池川与鮒並出江州湖中最多
而未煉取油但冬月不多出失水易死

ほそ　鰁　又はそ[illegible]
状[illegible]くり[illegible]

く今江河ともに大細にてみな川の
ほるゝ雌雄ともに脊まで淅く裡ゝ
雄も甚に小さく鰭短くして尾末
雌更より大きく口吻めぐりひげの
肉色赤くかろき肪ありて味更に
好く雌落し小更を最くらふ又雌に
雄ことひつきて法るとにこゝにて
早ゆく事いとゝし好て早るとよう
色もまた雄更小脊まで後白しと法る大さ七寸
にもて五六月比るより味をかろくよろしく秋風凉しく

吹てのち雄を雌のごとく脊まで腸のうち赤くうるはしと
ゝはとゝめあるに付して味かろくして雄の鰭の毒を去る
とけゝとゝ以
和名鈔曰唐韻云鱘 音時漢語抄曰波曽 魚名也似魴肥美江東四
月有之 うなりて今のん鮒のごとし
本草綱目曰時珍云鱘形秀而扁微似魴而長白色如銀
肉中多細刺如毛其子甚細賦故何景明称其銀鱘細脊
彭蠡林眼其美而多剌也大者不過三尺腹下有三角硬鱗
如甲其肪有鱘甲中下畧
右ゟ已三人とよりを考ふるに今ぬはとゝ鮒と今ぬはとゝ

国立国会図書館　タイトル『湖魚考 2巻』 請求記号 特1-3384
ガラス使用

南[illegible]

[illegible]

大和本仲曰ハス生江湖中琵琶湖ニ多シ味ヨシ長七八寸
細鱗白色尾鬣赤シ初夏時出連行其性好飛躍越舩
飛沈ス四五月自湖底泝於河溝以細取之浮陽之魚也以
鰕及蚯蚓為餌鈎　和名鈔　鰷魚ヲ波曽ト訓ス然トモ
網目所載鰷魚ハハスニ非ス

うぐひ　小ヲ柳ともし　鱒又鰔

状ほそくして口くちばしともに尖とがりいやしみるくに
多ければ漁人ぎょじんらいとく脊せ[illegible]高し後の上下ともに高

ホそくして口ばしともに尖りいやしみるくに多ければ漁人らいとく脊高し後の上下ともに高
ぐひともいふ春の末より谷川を上る夏の初めくだ
るくだるとも大きくなりても尺に過ず
ることを甚だ好む雨ふり風のやう
吟声をおもひおこすに似たり
夏秋の候ハハスの美味なる
下品ハハスは鰔の字を用ゐるなり
雄雌を甚だ好む雌雄ともに
和漢三才図會云　鰔　出所未詳恐俗字矣俗云
宇久比小者名夜来女

国立国会図書館　タイトル『湖魚考 2巻』　請求記号 特1-3384
ガラス使用

江州湖中多有之狀如鯇而腹赤背黒大者近尺肉有
細刺作鮓或炙食味淡并不美豆州箱根豊後所々
有之　本草綱目曰　石斑魚ヲウクヒト訓リ未詳

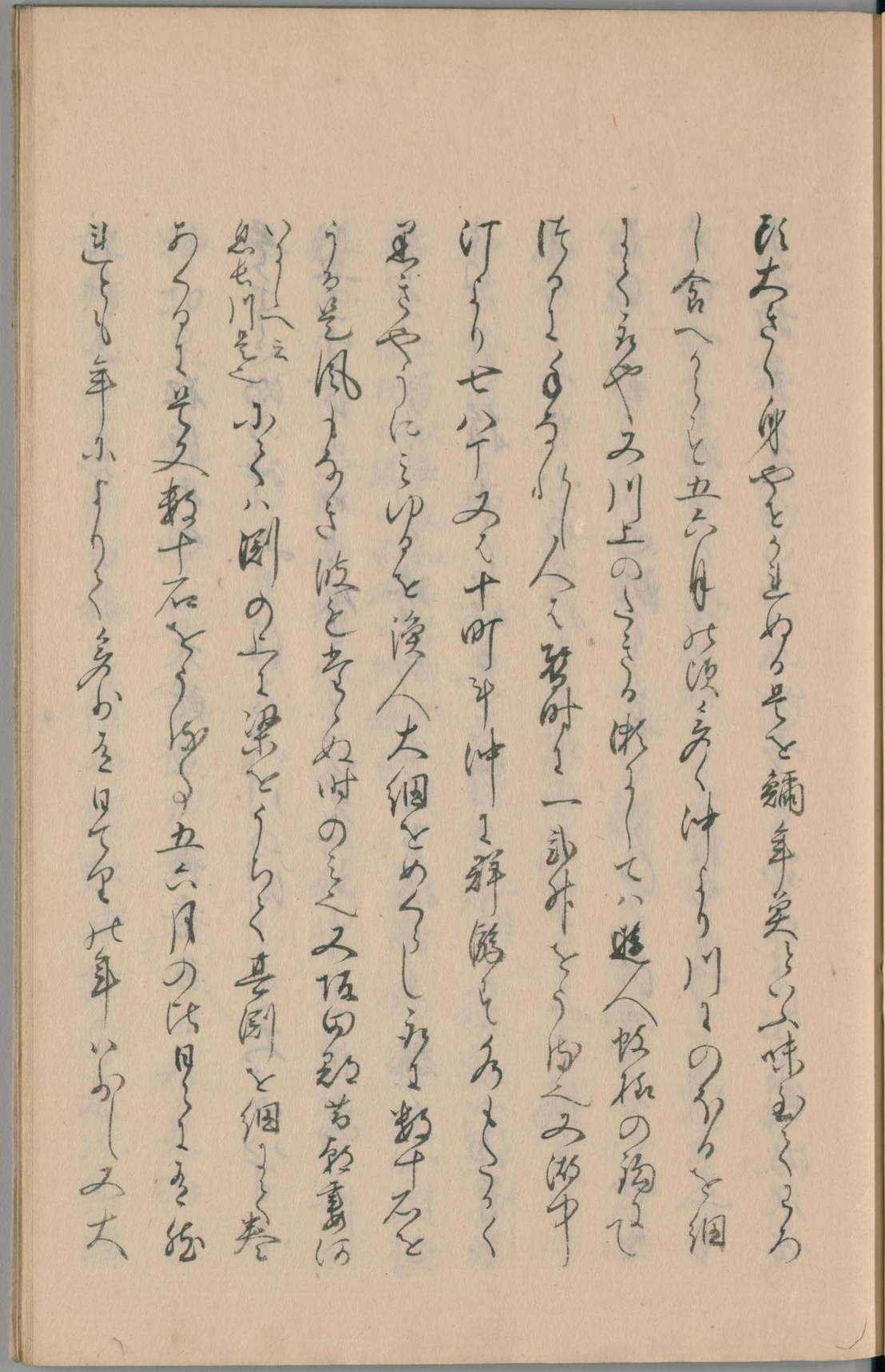
ひいを　氷魚

こいの如くほそ長き形大海の脂油多くして
秋十月の末より沖の深き処より多くつゐ川
三月比迄登りそを小あゆと云甲比も多くとり
味もくさみなし是ハ河口より遠く海より川くの淡
き海迄そのより成小年多くとる
多比宮守より是ハ始めの比川より本を
うらて網ふくろひろ之字治川のひを是ハ
うるく貴ことをおぼえす　古今集に
放ち飼ふ鵜の名ある大井二寺許氷を
そ又吉野比古き書にみえ今ハ
こゐの比ハ鮓のみことを聞ゆ氷魚ハ
ゐ程之海西小杉迄より都不遠
是ハ集り取之大分小あゆのごとし三四月ハいとを
いとゝ物ことゐの比ハ子をまもりて
こゐのごとくうれもよくとれ取之
事と思ふ

和名鈔曰鮠寿声切韻云鮠　青小今案俗云氷魚是也初字記冬事對玄有氷魚霜鶴之又而尋其義非也　白小魚也似鮸魚長一二寸也

こあめ　小年魚　小鰷魚

氷魚三四月氷消成ものにして小形の鮠魚の形柳葉のごとく背のごとくなる白色にして透徹くなるゆゑ名とす神功皇后紀に細鱗魚と書りそをいふなるべし大年魚ともいひしは背やゝ青みて透白し味美之言なるべし白魚を姫魚とも雅魚とも書しは此魚の形の如くなるゆゑ名とするなるべし



和名あゆ　大鮎魚　大香魚

そもそも湖の沖又は河の岡等を大さ七寸小
さ五六寸許にて放ちまたは養ひ置き
多く美ふくく脊の青きを
よりしく抜ととらひさるを淳
よりもまた小あゆにくく秋の氣すさみ風多き
むしてもりて逸翔りまくく
くはつともめくく味をなくて
是故春夏をいふ小やうにて川の岡の
くはそれをとるものを七月四五月の
比並の大なるものは長さ
大春夏ふとりたるくく雌
品なり

和名鈔曰　鮎　本草云鰀魚上音夷　蘇敬注云一名
鮎魚上音奴魚反和名安由物氏漢
語抄云銀口魚又云細鱗魚　崔禹錫食経云貌似
鱒而小有白皮無鱗春生夏長秋衰冬死故名年魚
也

神功皇后紀曰拳竿及獲細鱗魚后曰希見物也
故時人号其所曰梅豆羅今謂松浦訛焉是以其國

国立国会図書館　タイトル『湖魚考 2巻』 請求記号 特1-3384
ガラス使用

女人毎當四月上旬以鉤被河中捕享魚於今不絶惟
男子魚鉤不能獲魚
本草綱目曰鱊生江湖中小魚也長僅寸形狹而扁狀
如柳葉鱗細而整潔白可愛好群游最宜鱊逌也
或云鱊　和名鈔用鮎字俗従之鮎者鰋也
大和本草曰雨航雜録云香魚鱗細不鯉春初生月
長一寸至冬月長盈則越湖際生子生已輒稿一名記
月魚稿トアユノサフルヲ云豊後國早見郡立石村淺見川
ノ鱊ハ冬月ニ至テ下ラス其川温泉出テ水温ナル故成ル
なまづ　鯰

なまづ　岩ちやう　ぎちやう
赤なまづ

なまづくひ大なるくちを大きくひらき細き歯を多く並べて鰌
ゟ甚鋭利なり下顎白色にして鰌の下腹白色なるが如し
しかも大なる物も沖へ入ざる故大小
二三寸ばかりなるを専とす
鮒鯽の時にいたりてよく肥ゆ
中略
てうへいさしやうにて下品うまからず
まるまるとして美味ちくせつ

国立国会図書館　タイトル『湖魚考 2巻』 請求記号 特1-3384
ガラス使用

市に売渡の迚も取扱ふことそうこうしたこと
十七年間絶てなき九人余こゝに四百人のあく八かゝり
そこらふく五人余の処置なくくらう
ふく四五人のものをあくはねを
世ふなきやうそげとうもやうやうむ
或は肉糕をはじめとしてかまぼこ
とかへこそ彩々へし飯も麵のかまぼこ丼鯛のうをこと
又麩の肉糕をこと不調摩ぬをこと
ひし
又曰古来図有蒲鉾之名傳図近世江州庖人鹿間某
者初造之今諸家庖人競美或曰韓客謂之魚餅此亦
佳名也
大和本草云本草曰無毒或曰有毒肉糕ときれば痛
人ともに無害瘧疫になるものを食へばよくなつるこゝの方
ものゝ名称ものゝ来ることをよく知れるを今ふくそく
ふくもの
和名鈔曰鯰　崔禹錫食経云鯰　奴露反和名奈万豆漢語抄用鯰字出所未詳
貌似鮠而大頭者也
鮎　鯰　鰋　鯰　鮸　上二字未詳
本草綱目曰大口其額平夷低偃故名　鰋名　鯰其延黏滑

国立国会図書館　タイトル『湖魚考 2巻』 請求記号 特1-3384
ガラス使用

故名鮸　鼅身體尾大腹有胃有齒有鬣生流水有青白
生止水者色青黄大者亦至三四十斤目赤鬣無腮
者有大毒
本朝食鑑曰昔江州海津之濱有前越漁父練水者
語里人曰我越之海底無不見乎生得練誉而不見
今此湖底則有何面目見魚人永為遺憾矣里人曰
往年有練水之人沒于湖水到竹生島之深處偶見
群龍驚怖欲絶竟歸今子亦然請息漁父曰曾閲竹
生島記水之中間水底空曠通于四方然則見之亦
幸甚緑有群龍而神物何害人耶從海津之濱入于
水中過両三時不出自已至未浮于彦根水上乘舟
歸村告里人曰海底無龍但有群鮸其巨大不可量
衝之傍巖出島之北岸風悪波高不能直歸故至彦
根之水上帰矣又謂琵琶湖八月中旬月明夜鮸魚
數千自跳投于竹島北洲砂上而踊躍顛倒是不知
何故也

うなぎ　又万葉集十六巻よひらさとのこと

鰻鱓　鱣魚

うなぎ

四季ともに但冬ごもり状大海ともに多し糸
くまく腹白しまた黄くまき腹とう千黄之池ニ有

国立国会図書館　タイトル『湖魚考 2巻』 請求記号 特1-3384
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『湖魚考 2巻』 請求記号 特1-3384
ガラス使用

者可食重四五斤者不可食食之死ストス云種類ニヨリテ
然ニヤ日向ノ大ウナキハ食シテ無毒ト云
或曰豆州三島神沼鱣生耳是老変ル
和名鈔曰鱣魚　文字集畧云鱣上知連切音天和名無奈木　黄魚
銃頭口在頸下似蛇魚者也本草云鮎魚市演反上音善和名上同
一名鯰鮎上音秋一名鮪魦下頻縈切甫昆二音烏首魚　一名鮫魚軌鴈
二音爾雅注云鱣似蛇今按鱣鮎字也卽　白鱣　蛇魚
本草綱目曰状如鮀背有肉鬣連尾無鱗有舌腹白
大者長数尺脂膏多養穿深穴有雄無雌以影漫於
鰻鱺則其子皆附于鱧鬐而生故名鰻鱺鱺与鱧同

音里
凡鰻鱺燒烟熏致令化為水熏鼈及屋舎竹木断蛀
蟲置骨於衣箱断諸虫
同云四月者數人背有白點無肥者不可食妊娠食
之腹有疾
僧契云ウナキハ胸鰐平在頸下鰓當在胸
　黄顙魚　鰋鮡絲　ちまぎく
狀似鯰多黄口廣く鬚上下ニ七枝六箇
ありて扁形ち大く白し細き遠き尾の方
次第に小くなりて末尖る脊の上下に針

食物本草云鰱絲魚生諸溪河中黃褐色無鱗澗口有細齒如鋸腮下有硬刺骨亦硬善吞小魚肉薄味短　本草食鑑云鰱生千溪澗田水間狀類加志加魚而有鬐背淡黑帶黃赤頸大口澗其尾有小岐背上鬐刺螫人大者及尺有声如蛙鳴俚語曰吾喜吾喜人捕之則哀声甚悲野人之食也

詠ハ小稚ノ鱭魚ト云ヲ略ギ云ハヽ

ぬるゝんゝと云ふり

どちやり　泥鰌　鯫魚

又云まどちやうに

田くらどちやうう
桜壹枚く土長と
ろねんん

田水の源川の源第一ふく海さ
て雄一年魚四五寸を口とり
く雑ふ多くく成ふとく
きんけりうきのとくねりう
ふも用お投を望ととく味し雄大
或は大海の類のとく大小共あ
ふてよく似り縁り

ふとうとく
ひきとどちやうふく清み
ふくふくたとく筋とく
刺あにを大さ三寸計しやを
活どちやうとも魔ごちやうと
ひきとにふ裏とやせく田み
ふくくふを考へ
田くらとちやう形状大さく尾細
ふくひふとく形と色も
ふとく海川
ふを七さ二寸余り

[illegible]

[illegible]

[illegible]

本草綱目 鱮魚 文魚 玄鱧 黒魚 烏鱧 蠹魚
なとの文字ありて今用ふるものと
別物也

同曰鯛生江池澤取無時形長體田頸尾相等細鱗
玄色有斑點花文頗類蝮蛇有舌有歯有肚背腹有
鬣連尾々無肢形状可憎氣息鯉惡食品所卑也頭
斑點有七作北斗之象夜則仰首向北朝北斗有自
然之礼故字以礼者与蛇通気色黒北方之魚故有
玄黒鳥之諸名
或曰大〻大低尺許大者二尺餘背蒼黒有光腹色稍
淺其首不尖
今つく乞大小の違ひはあれどもくさ〻北海浜より此
魚の干ものをもてきたりて売るを見るに右の説のとし海辺の人
民は四季を大抵をもて中位の筆此魚のこと多き

むし

[illegible]酒[illegible]清[illegible]此又水川[illegible]の
[illegible]ことなめくかしりこと[illegible]ようと[illegible]大[illegible]
の[illegible]ようと美[illegible]ようく幅[illegible]弁[illegible]老
[illegible]ふくようてなし矣[illegible]多[illegible]くようと[illegible]赤[illegible]
[illegible]ようと又[illegible]赤くなくしてかしちいさく
[illegible]ふく稚[illegible]くまを筋[illegible]ようと塩むし
[illegible]子花赤むし[illegible]もつと[illegible]味[illegible]ようし
[illegible]ようと矣[illegible]へ[illegible]又井中[illegible]いをなけんよう

[illegible]ようと大海[illegible]むしと[illegible]ふを薬[illegible]弁[illegible]と
[illegible]ようと大[illegible]ようと[illegible]ようと[illegible]ようと矣し[illegible]そと[illegible]石[illegible]
大和本草[illegible]石東土西[illegible]弁[illegible]ようと筑[illegible]
[illegible]若七[illegible]年沈[illegible]り変[illegible]と姓沈[illegible]と[illegible]
五般石首魚[illegible]ようく[illegible]ようと[illegible]ようと[illegible]
[illegible]ようと[illegible]ようと[illegible]ようと[illegible]ようと[illegible]
或曰年都奥溪澗空穴中有之又浮漈大四五寸似
鰿而畧田浅黒細鰿硬硬鰭尾有肉柔味不美下品
[illegible]ようと[illegible]ようと[illegible]ようと[illegible]ようと
あぶらこ[illegible]ようと[illegible]ようと[illegible]ようと[illegible]ようと
又[illegible]ようと[illegible]ようと[illegible]ようと[illegible]ようと

国立国会図書館　タイトル『湖魚考 2巻』 請求記号 特1-3384
ガラス使用

山中溪川池なとの岩そこなとに
やうやうやうやうを形めしつのとく
ありて長さ一尺餘と脊の中に横たはり
強しく雌雄をとりかくし肉やはらかにして味
を仕活あまい第一也夫とむかしより
よくそこなひ鯉鮒のやうに年毎に多くなる事
あらざれば美とするにたらず又物のこと
もろこ 志ら魚 又物のこと

小ぢごろんとそ

すごりのこと

石もろこ 田のもろこ ふなひりのこと

状狀葉はくりくりとして二寸餘
ちいさきもの也是をとりて煮
て食ふに甚美味也

国立国会図書館　タイトル『湖魚考 2巻』 請求記号 特1-3384

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『湖魚考 2巻』 請求記号 特1-3384
ガラス使用

又事也

はえ　魵　鱦

おいそ

状もろこに似てやゝ扁く背の色白く脊に茶色にかゝりたる
斑文ありて大さ手のひらより
やゝ小さし　春夏の間水草の
間に游ぐ　秋になりて江川に下る
味を賞して釣ることおゝし
和名鈔曰　魵　四声字苑云魵
巨灰干戈同反　漢語抄云波江又用鱦字

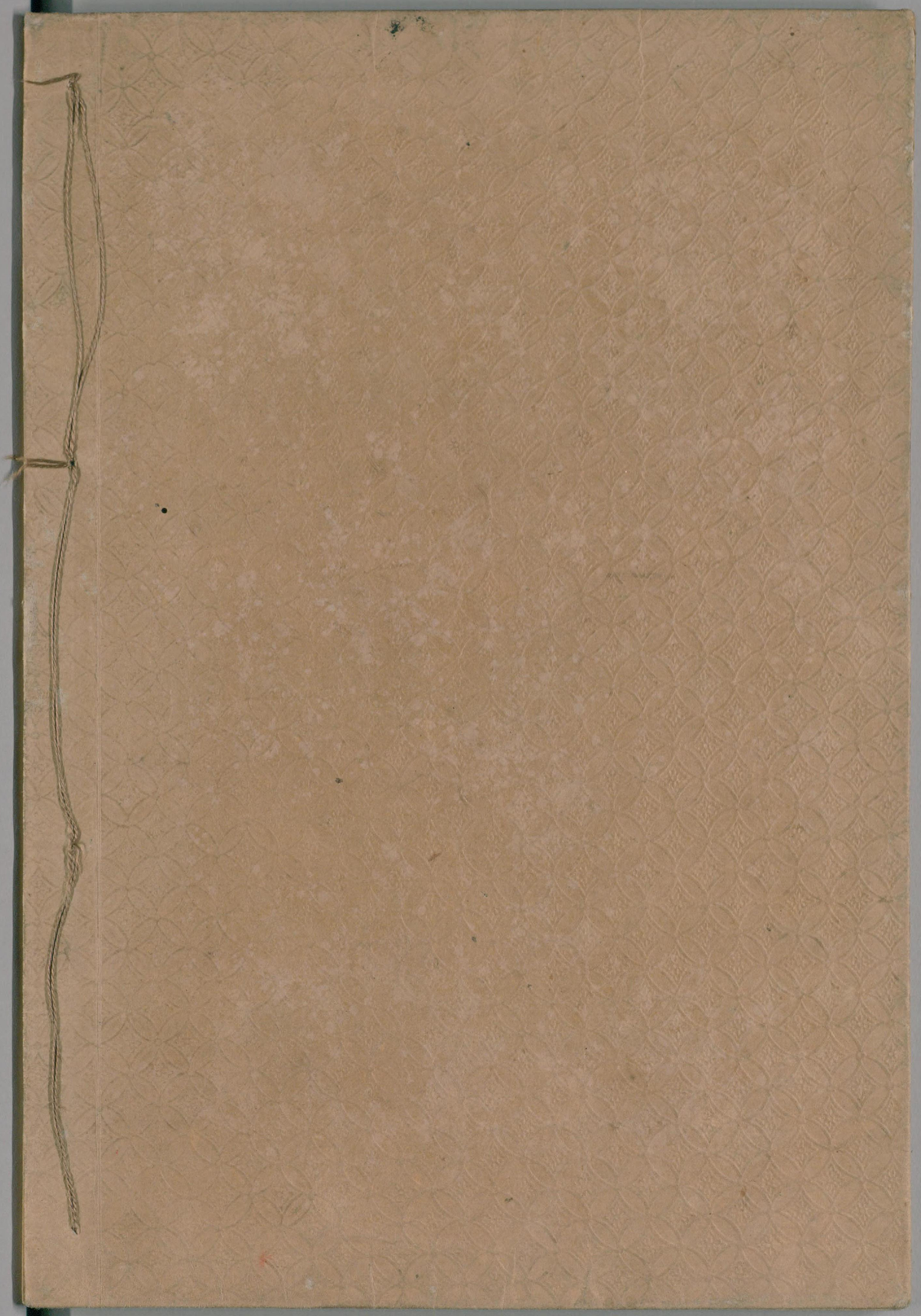
出所未詳　魚似鮎白色也

節用集曰鯷をスバシリと訓す同字異矣也
或曰鰮を小工と訓す秀
ばこ　火焼編　雄魚之
うす赤ひら　又ひらこざかい
ひらちやう　ほそこざかい
汐の岸ゝ岩窟のごとき又川の側よ
り水ゆるく流るゝ所に多く群集
雄魚之ひれをあつめ糸のごとくに
いと長くして味ひ品よき故歟の大さ
一尺ばかりなる又ハ川の側のごとき
ものゝ三四年を経ざれば大ならず
ゆゑに小鯛ともいふ
俗称　雌雄ともに味ひよく脂多く
なる故歟
雄魚のひれ糸のごとくに長く
垂るゝ故ひれ細ふして三四寸の
ものゝ如し
雌雄ともに味ひよく脂多く
雄魚

特 1
3384

中ゟ出候ゟ
ゟとばゟこれゟ別ゟ
湖ゟゟゟ時ゟゟ
ゟはゟゟ
候ゟゟ云ゟ
毛物ゟゟゟ

国立国会図書館　タイトル『湖魚考 2巻』 請求記号 特1-3384
ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『湖魚考 2巻』 請求記号 特1-3384

ガラス使用